
bullets 0 から始まる物語

今雲流鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

bullets 0から始まる物語

【Zコード】

N6405P

【作者名】

今雲流鬼

【あらすじ】

人を殺したことのなかつた殺し屋、御凪れいと彼女を取り巻く人々の慄く強かな物語へと続く物語。

れいと弾丸たちの出会い……いくつも潜り抜けてきた死線……もう1人の「一」の名を持つ弾丸……れいが振り返るその軌跡にはいくつもの『生』と『死』があつた。

有北真那改め、今雲流鬼が手がける単独小説、元日開幕

死後の世界があつたとして、
私は皆と同じ地獄にいける。

そう言って、

初めて人を殺した殺し屋は笑つたんだ。

ビルの山へ消える雲1つない青空。なんて清々しいのだろうか。
頬を撫でるそよ風には街路樹の香が混ざつている。

緑のカーテンから降り注ぐ木漏れ日は春の訪れを感じさせてくれる。
公園の隅に設置された木造のペアシート。その左側に座るのは
皆さんこんにちは、御正れいです、またお会いしましたね。

あの騒動から早くも3ヶ月が経ちました。

が、私はいつも通り浅葱色あさぎいろのセーラー服姿です。決してコスプレ
ではありませんよ。年齢的にもまだセーフ！

その上に羽織るトレンチコートは新品です。

まあ、私の気持ちは今もぐらぐらと不安定ですが、世界は何事も
なかつたかのようにいつも通り動いています。

人の『死』から遠ざかつてからというもの、幸か不幸か生きてい
る実感が薄れたような気がします。

あ、でも先週、フフフ……第1助手の源三君が車に撥ねられて死

……。

「ちょっと待てえええええ！」

勢いよく突っ込みを入れてきたのはその第1助手の火村源三だ。

「人があんたの我がまま聞いてクレープ買いに行つてゐる間に勝手な
回想してると思つたら、何であんたの脳内で俺は死んでるのかな！」

? しかも思い出し笑いしたな！？

小柄な源三はジーパンに黒いPマークを着て、茶色のマフラーを巻いている。いわゆる普通の格好だ。

「フフフ、読者の皆さんに今の近況を教えてやるひつと思つてな」私は皿慢の一つ、ツインテールに結んだ超ロングでつややかな黒髪を膝の上でいじいじしながら、ニヤツ、とした笑顔を見せてやつた。

ちなみにこのツインテール。皆さんの想像以上に長いですよ。私の身長は女子の中でいえば高いほう（これ以上詳しいことはこの女に聞いちゃダメよ）だが、ツインテの先っぽはつこに膝に到達しました！

立つた状態で膝に届くので、今みたいに座つていると地面について汚れちゃうんです。だから髪とお手てはお膝の上なんです。

ちなみに髪止めは、左は使い古された「ムの髪止めで、右は白地に水玉柄のシユシユです。

「」の一見、間違つてしまつたようなファッショング、あえて、だところのことを理解できるのは……今では源三くらいだらう。

「状況は正確に正しくお願ひしますよ。……俺は生きてますからね」源三は悲しみと優しさが入り混じつたような笑いを見せ、私の右隣に座つた。

「ああ……、悪い」

『死ぬ』とか『生きる』といつ言葉が、今の源三にはまだ傷を抉る言葉のようだ。

「はい、クレープ」

源三は持つていたクレープの一つを私の目の前に出現させた。突然無性に食べたくなつてしまつたので、さつき源三に買いに行かせたんだつた。

源三の顔を見ると、俺優しいでしょ、つて顔で優越感的なものに浸つている。

世間ではそれを『ドヤ顔』というんだよ。

まあいい、食べよう。

「いつまでもこんななんじゃダメですよね」

源三は自分の分のクレープを一口かじって空を見上げた。

私も一口かじって空を見上げてみる。

同じ一口でもそのかじり跡の大きさの違いが、小柄の源三も男なんだなと感じてしまう。

「空は……遠いな。でも、近そうにも見える」

私はクレープをもう一口かじってみる。今度は口を大きく広げてぱくつ。

生クリームの滑らかな甘さが口いっぱいに広がり、不覚にも私の脳味噌は一瞬で幸せに満ち、さらにもう一口かじった。

「あまりにも遠すぎて近く感じてしまつんですよ。人間の脳ってバカだから」

生クリーム如きでこんなに幸せを感じてしまうんだから、確かに脳はおバカさんだな。

「バカなくせに、嫌なことはいつまでも覚えていやがる」

源三はすっと空を眺めたまま、一定のリズムでクレープをかじっている。

私は、うん、と一言返し、両手で持った自分のクレープと源三のクレープをちらりと見比べた。

「ついてるぞ」

クレープを見ようとしたはずなのに、私の視線はなぜか源三の顔にいつっていた。

源三の口元には 生クリーム。

男といえどまだまだ子供だな、フフッ。

人差し指の腹で丁寧にすくい取り、いただきー

「ちよつ……！」

源三の頬は、ぽぽぽ、と少ししづつ赤らんでいく。やつぱり子供だな、フフッ。

空は……やつぱり遠いや。

……つて何で私まで赤くなつてるんだ？

違う、これは……暑い！ そう、コート着てるから暑いんだ！

「にしても、まだまだ風が冷たいっすねー」

縮こまりながら少しだけ近づこうとした源三のみぞおちに私は右肘を突き刺した。

「なあ、源三」

クレープを食べ終えたからか、源三に向かう顔が自然と笑顔になつてしまつ。

くそつ、表情筋が……！

「何です？」

私の分のクレープの包みも捨ててくれた源三は私と視線を合わさずに右側に座り直した。

何でまだ顔が赤いんだ？ そんなに寒いか？

「私もまだ、まあその……整理がつかないんだ。今でもまだ、あそこには帰れば皆が待つてくれてるんじゃないかなって。そう思つと眠れなくなつちゃうんだ」

初めてだらうな。あの騒動以来、私は自分の黒い部分の気持ちを誰にも話していない。

言えば何かが壊れてしまいそうで、怖くて怖くて仕方なかつた。目の前で仲間が、いや、家族が死んでいく……そんな光景を思い出しては息が詰まつた。

源三は……少し困つた顔をしているな。当然だらうな。

「時が経てば癒える傷もあるけど、私達の場合は違うと思つんだ。だから……付いて来い！」

今なら大丈夫な気がする。

確証はないけど、今ならあそこに行つてもいい気がするんだ。

「走るぞ！」

私は驚いて目を丸くしている源三の手を取つた。

走るぞ……か、フフッ。

敵を追つでもなく、追われるでもなく、ただ自分が走りたいから走る。

そんな単純な行動も久しぶりにやつた気がする。
息はすぐ切れだし、汗もどんどん流れてきた。
それでもこの脚を止めたくはなかつた。

なぜだろう。

あの頃が夢だつたんじやないかと思つくらい、今、私は感じている

私は『生』きてる！

「はあはあはあ…………はあはあ…………はあ～」

私は思った

遠い！！

「体力ないのに、全力で、走るから、ですよー」
さすがの源三もだいぶ息が上がつていいようだ。
膝に両手をつけて、顎の先端からほたほたと汗が地面に落ちていいく。

「あ…………はあはあ

言葉が……出てこない！　こんなに体力が落ちたとは…………いや、
元から…………？

つてそれは今はいい。

仕方ない。指を差すから見る、源三。

「大丈夫ですか、れいさん？」

源三は私と私の指差す方を交互に見ている。

私の指の先にあるもの

旧帝国軍の施設跡を乗つ取り、内部を少し弄つた私達のアジ

ト…………だった場所。

「き…………れい…………すぎ」

綺麗すぎる…………つて言いたいのに！

源三は私の言葉を必死にくみ取ろうと唸つてゐる。

そして、ぽんつ、と左掌の上にグーにした右手を乗せ、頭上の豆

電球を、ぱつ、と点灯させた。

必死に搾り出した言葉の真意は源三に欠片も伝わらなかつた。

「ああ……好きだよ

「ドスツ！

一応説明しておこう。殴つた音だ。

つたく！ な、何で告白してんだよ！

あーもう！ 何で私は顔が赤くなつてんのよ！

「ぐ……う……」

源三は腹を押さえてミミズみたいにうねうねしてゐる。

ついつい本氣でやつてしまつたみたいだ。私の右手も少しズキズキする。

「そろそろ来る頃だと思つてゐた」

突如、聞き覚えのある声が耳に流れ込んできた。
アジトの入口に佇んでいるのは

「一之瀬君！」

だ。
一之瀬亨一。

彼は一番最後に仲間に加わつた無口なイケメン。

長かつた前髪は横に流れ、少し茶色に染めたおかげか、かつての暗い雰囲気が和らぐどころか今風のモテ男へと変身している！？
家は狩猟が出来るくらい裕福らしいんだけど、訳あって家出。
ま、人の過去を探るのは私が決めた禁止事項の一つだから、本人

が言わないことまでは知らない。

それと、視力がとてつもなく良い。

彼と初めて会つたあの日、照準機もつけずに800m先の目標を狙撃銃のレミントンM700で射抜いたことは鮮明に思い出せる。

「見違えたわねっ！」

近江一家との一件でバラバラになつて以来、もう会うことのない

と思つていたのに……まさかここでまた会えるなんて！

「れいは変わらな……、いや、少し明るくなつたか？」

外見は変わつても、彼のローテンションの喋り方は変わつていな
いみたいだ。

「ジャケットにブーツなんて……現代っ子になつたわね～」

私はニヤニヤしながら肘で一之瀬君の腰を小突いた。

一瞬骨盤かと思ったその場所にあつたものは

クナイだ。

言い忘れていたが、彼はクナイのことになると熱く語りだしてしまつ。何かのスイッチが入るんだな、うん。

あ、決して忍者ではないと思う……たぶん。

「お～い、話しが噛み合つてないぞ、お一人さん」
後ろから源三の詰まつたような声が聞こえてくる。
立てるよつになつたか。まだお腹押さえてるけど。

「お、いたのか」

一之瀬君はわざとらしく驚いた表情を見せてる。

「お前は相変わらず先輩に対する態度がなつていな……」

言葉とは裏腹に、源三の顔は怒つていなようだ。もつ慣れたの
か？

そつそつ、もつ一つ言つて忘れていたが、一之瀬君は敬語が苦手ら
しい。

ただ、源三に对してはわざとな氣もするが……まあいいや。

「で、何で一之瀬君がここにいるの？ アジトも綺麗すぎでしょ？」

私は改めてアジトの外壁を見回した。

3ヶ月も放置していればけつこう汚れが目立つてく岷つのだ
が……。

視界の端つこで源三が、綺麗……あ、れい……すぎ……あつ！
つて具合でさつきの私の言葉がやつと理解できたらしく、顔を真つ
赤にさせている。

「前に罰として俺と火村に基地の徹底大掃除を命令したことがあつ

たんだけど……覚えてるわけないよな？」

「之瀬君は後ろ髪をポリポリ搔きながらそっぽを向いている。

「それを、わざわざ……？」

私は茫然、とこりうか、少し笑いが込み上げてきた。

「することもなかつたしな……」

ちょっと一之瀬君、明らかに恥ずかしそうじやん。顔とか少し赤いぞ。

「なんだよ、少しばかりじこと出来るじゃねーか」

「火村の分は残しておいた」

「ええっ！？」

「俺達2人への命令だつたから」

源三はきつと心の中で直前の言葉を撤回しただらうな、フフッ。あ、アジトに逃げた。

「れい達はどうしてここに？」

一之瀬君は先輩（と思つてゐるのかな？）の寂しそうな背中を横目に捉えながら聞いてきた。

「まあなんだその……ここに来れば少しばらは気持ちが変わるかな……つてさ」

くそ、また顔が赤くなつてきてる！
はつ、つられて私も後ろ髪搔いてるし！

「そりが」

一之瀬君はそれ以上言葉を返さなかつた。それがきつと彼なりの優しさなんだろう。

私は一之瀬君と並んでアジトへ歩いた。

源三以外の人と一緒にいるのが久しぶりだからかな？ 少しどきする……。

い、いやっ！

ドキドキつて別にそういう変なことじやないよ！

源三とも四六時中ずっと一緒にいたわけじやないんだからな！
だからこのドキドキは……喜び！ そう、喜びよ！

仲間と会えたんだから喜んでもいいでしょ、バカつ！！

「おまつ！？ 半分とはいえよく一人でやつたな……」

掃除開始から30分、運動不足の源三は既にガタがきた様子。廊下の床磨きをやつていたようだが、もう壁に背中を預けて座り込んじやつてるよ。

でも確かに一之瀬君は凄い。

元が軍の施設だつただけのことはあり、小部屋や通路がやたら多い。

天井はそこまで高くないものの、60年以上も前のものとは思えない出来栄えだ。

「本当に皆、居なくなつちゃつたんだねー」

私と一之瀬君がいるのはよく宴会をやつていた、いわゆる食堂という部屋。

と言つてももちろんショーフなんていなかつたから、いつも皆がコンビニで買つてきたものを広げてわいわいやつていただけだ。

そんな場所に今は一之瀬君と2人つきり。

無駄に広く感じてしまつ空間に、一度と帰つてこない仲間達を思い出させられてしまう。

このリサイクルショップで大量に仕入れた椅子も、今じやその役目を失つている。

「れい、目を閉じて」

机を挟んで反対側に座る一之瀬君は右肘を付き、手のひらに顎を乗せている。

「え？ う、うん」

再び膝の上に乗せた髪を弄つていた私はそれを中断し、言われた通りに目を閉じてみた。

背中は床と垂直に伸び、おもちゃを取られた手はグーにしてきちんと腿の上へ。

「聞こえないか？」

「……何が？」

「俺がここで過ごしたのはほんの短い間だつたけど、そんな俺にも聞こえるんだ。れいならちゃんと、全員の声が聞こえるはずだ」

そう言つた一之瀬君も目を閉じて何かに耳を傾けているのだろう。

シーンと沈黙がだけが続く中、微かに耳の奥で何かが聞こえてきた。

「……あ、聞こえる。皆の……皆の笑い声だ！」

声が、笑顔が重なつて、耳の奥と、目蓋の裏に思い出される。

「……あれ？」

自分でも気づかなかつた。

いつの間にか、自然と目の端から大粒の涙が溢れていた。

「つたく、一之瀬の野郎め」

やけにリアルな声がすると思つたら廊下からだ。

きつと源三も私みたいな状態だらうな、フフッ。

「ありがとう、一之瀬君！」

ゆつくりと目蓋を開いてみると、涙のせいか世界が少しだけ輝いて見えた。

蛍光灯の光が屈折して十字に輝いている。

「思い出すなー、私が皆と出会つていつた日々」

私は立ち上がり、2、3歩机から離れて一之瀬君の方へ振り返つた。

「聞きたい？」

ぶりつ子を意識したつもりはないのだが、振り向いた私は手を後ろで組んで、上半身を少し屈めて首を左に傾げている。

我ながらこれはきっと……可愛い……はず。

「じゃあ、是非聞かせてくれ」

一之瀬君はフツ、と笑いながら脚を組み直した。

その際、すぐに視線を横にずらした。頬を赤くさせながら、ね。

「フフッ……あれは今から何年前になるかしら。最初の仲間は、四季だったわね

「

01・瞳の住人（後書き）

明けましておめでとうございます、元有北真那こと今雲流鬼です。

このたびはリレー小説『bullets』 独りの少女の弾丸たち『』の続編にして過去編を私が勝手に書かせていただくことなりましたというかしました。

bulletsの2番手として散々爆弾放り込んで散らかしてきた私ですが、今回は少し真面目にやるううと思つています！つて言つてゐそばから第1話が青春ラブストリー風（笑）

更新頻度は少し遅くなると思いますが、ぜひよろしくお願ひします
m（—）m

P・S・

2／13に一人称の進行を大幅に編集したため、セリフ等の内容も少し変わりました。
ご了承下さい。

from ルキ

「……と、昔話に入る前にだ」

私は首を伸ばして入り口へと視線を向ける。

「聞きたいのならお前も中に入ってくれればいいだろ、源三」

隠れているつもりだろうがバレバレだよ。

入り口に小心翼えて見る黒い陰、源三はビクッと反応し、田を合わせないようそっぽを向きながら歩いてきた。

「時間はたっぷりあることだし……」

そう言つて享一はどこからかコンビニのビニール袋を取り出しつつ、中の缶ジュース（？）数本とおつまみがを机に並べた。

「さつすが一之瀬君！」

私はもちろんお気に入りの葡萄ジュース（？）をいただきます！

カシユツ グビツグビツ ふはあーーーー！

やつぱり葡萄ジュース（？）は最高だなあ！

鼻に抜けるアルコー……あ、熱い感覚と、喉を通る、カー、つと

した感じ！

おっ！ カツパ えびせんもあるじゃん！ 一之瀬君は分かってるなー！

カリツ！

このサクサク感といい、絶妙な塩味といい、最高だなあ！

「んだよ、スルメはねーのか」

ちやつかりと享一の隣に座った源三はおつまみを物色しているようだ。

「源三、かきぴーよこせー！」

グビツと喉で音立て、左手でおつまみをよこすよつじゅースチャーチして催促してみる。

「はいはー。さて俺はどれにしようかなー」

ちゃんととかきぴーを掌に乗せてくれた源三は、机に並んだジュー
ス（？）の中から何を飲もうか悩みだした。

「……」

一之瀬君はとこりうと、少し呆れながら右手に持ったカップ酒を飲
んでいる。

「おい一之瀬、未成年は酒を飲むな！ そして酒じやなくてジュー
ス（？）だ！」

悩みぬいたあげく、オレンジジュース（？）をガブ飲みした源三
はその場に立ち上がりて天井に向かつて叫んでいる。

「気にはんない！――」

その源三のみぞおちを私は酔いのせいで手加減を忘れた正拳突き
で貫いた。

「お……ぎゅふつ……」

声にならない叫びを漏らしながら源三はリングに沈んだ。

「……大丈夫か？」

シンシン、と一之瀬君はうずくまつた源三の後頭部を突いている。
これだから後輩に舐められるんだよ、フフッ。

「れい……さん……いい加減、その癖……なんとか……ぎゅ
ふおつ……？」

「おつとスマンスマン、手が滑った」

「ちよつ、あと二三で踵が田ん玉直撃でしたよ！？ なーんで酒
飲むといつとも……」じょおおお――？」

「うるせこうるせこうるせ――」これは酒じやない！―― ジュー
ース（？）よ――」

「れい、そのくらこにしないとホントに火村が死ぬ

「……1回くらこ、死んでみる？」

あ、私今、自然と笑てる！ 心からの笑顔が出せるよ――

「い……いやあああ――」

「……大丈夫か？」

シンシン、と一々瀬君は白田をむいて口から泡を吹いている源三の肩を突いている。

「フフッ……さてと、そろそろ昔話でもするか？」

「俺はいいが……」

椅子に戻った一々瀬君は苦笑いしながら源三を見下ろしている。
……うん、コレは放っておこう。そうじよつ。
さてと、ここで私は落ち着くために足を組み直します。
次に、右、左と一回ずつ由慢のツインテール手ぐしを入れます。
最後に小さな咳を一回して、うん、準備完了！
目をつぶつて、ゆっくりと話し始めればいい。
そう、まずは私の生まれについてから。

「れい。お前の名前は、れいだ」

終わりを告げ、始まりを伝える。

私の名前は、御凪れい。

私が生まれた『御凪』は、100年を越える老舗の酒屋だ。
だから私はお酒には強い。

……その目は何だ？ 疑つているのか？

祖父は私が生まれる前に死に、父親が社長をやっていた。

「子供に酒はダメだ！」

父はそう言つていつも私を酒蔵に入れてくれない。

普段生活する家と酒蔵は車で十分くらいの距離なのに、ずーっと籠りっぱなしで帰つてくれなかつた。

俺はオヤジを越えるんだー、とか言つちやつて、たまに帰つてきて「れい、また大きくなつたな」なんて、それは田舎の叔父ちゃんのセリフでしょ？

それで私がもつと遊んでー、つて喚けば「女の子なんだからもつと上品になさい」つて母が頭をなでなで……。

そこで私は口を尖らしてこう言つのだ。

「色んな男の人とおねんねすると上品なの?」
夫が普段いないのをいいことに毎晩違う男の人と夜を過ごしていた母。

顔を真つ赤にして口をぱくぱくしていた。

生活用の家はちつちやな山の上に建つてて、豪邸で、お城みたい。私の部屋はその2階にあつて執事やらメイドやら家政婦やら色々いたし、何も不自由なく暮らしていた。

勉強なんて家庭教師で十分よー、つて母の一言で私は学校に行つてません。

「れいちゃんはお父さんに似て賢いわねー」

カールがかつた茶色い髪の先生の口癖。

なんでも凄くいいとこの学校を出た人らしい。

今となつては顔も思い出せない。

そんな私に少しは同年代の子と接しられるようことが、つて思つてとつた母の行動。

それは同じ年の子を『買ひ』こと。

「初めまして、れいお嬢様。四季美里亞しきみりあです」

「…………よ、よの……しく」

そう、母は四季を四季の家族からお金で買ひ、その一生を私に捧げるよう命じたの。

人形で遊んでいた私の目の前に現れたその少女は、幼ないながらも整つた顔立ち、艶々した黒く長い髪。

着慣れないピンクのワンピースをまとい、緊張しながらも私にぎこちない笑顔を見せていた。

あの子が私を『お嬢様』つて呼び続いているのはそのままの意味。四季と私が初めて会つた日は、その後を予兆するかのよつた荒れ

た天気だつたわ。

重い雲が低く重なり、大きな雨粒は風に乗つて吹き荒れていた。

でも母は、そして父も四季を奴隸のように扱つたわ。

「とつとと動きなさいよ！」

「何でこんなことも出来ないの！？」

「お前は俺達に買われたんだよ！」

私が眠っている間、四季は毎晩のように罵声とビンタを浴びせられていた。

そのことに気付いた時には、彼女の身体は既にアザだらけだった。まだ10歳がそこらの女の子だったのに……。

優しく、温かく育てられた私は大人達の顔色ばかりをうかがい、次第に四季といるとき以外で笑顔になることはなくなつた。

厳しく、乱暴に扱われた四季は英語、空手、柔道を既にマスターし、変わりにその瞳や表情から人間らしさが失われていった。私達はどうにかしてここから逃げ出しあつた。

「お嬢様……私、もう……！」

11歳の春。桜の木が緑色に変わり始めてきたある日。四季は初めて私の前で涙を見せた。

「でもこの家から出ることなんて……」

ベッドの上、うなだれる四季を前に、私にはどうすることもできない。

この家はまるで牢屋のように私達を閉じ込め続けていた。

「お嬢様……お許し下さい！」

「四季……つ！？」

後ろに回り込んだ四季は私の首、延髄を手刀で軽く叩いた。

私は視界が一瞬ブレたかと思うと、意識なく倒れた。……らしい。

私を氣絶させた彼女は1階のキッチンにいる母のもとへ向かつた。

「ん？ 何か用かい？」

四季の存在に気がついても、見向きもしない母。

でもそのほうが好都合。

「んつ！……？」

四季は両手でしつかりと包丁を握り、力いっぱい背中に突き刺した。

「う……この、コムスメエ……」

四季はいつたん距離をとり、よろめきながら振り向いた母へ一気に近づいて腕を振り回した。

右に縦に……、いや、縦から右だつたのか、それが分からぬほどの早さで銀の刃を振った。

母の胸には大きな十字架が刻まれ……仰向けに倒れ……死んだ。

大量に噴き出した鮮血は四季の薄い緑色のドレスと水色の絨毯を見る見るうちに赤黒く染めていく。

物音に気付いてやつてきた父は目を見開いて言葉を失った。

床も壁もべつとりした赤い液体で染まり、それが自分の妻の胸から溢れる血だと気づくのに時間は掛からない。

そしてこの惨劇の実行犯が目の前にいる11歳の少女だという事実もすぐに気がついた。

四季は包丁を握り直した右手を真つ直ぐに挙げ……振り下ろす。ドスッ！

投げられた包丁は正確に父の胸の中心に突き刺さり、膝から崩れ落ちた。

意識が戻った私はゆっくりと体を起こす。

はつきりとなってきた視界の真ん中には四季がいる……全身を赤く染め、茫然とたたずむ四季が。

「…………き？」

私が恐る恐る彼女へと近づくと……。

「『めんなさい』『めんなさい』……」

四季は自分が涙を流していることにも気づかず、ただ無機質にその言葉だけを繰り返した。

私はただ、抱きしめていることしか出来なかつた……。

「四季」

「……はい」

「行くわよ」

「え？」

しばらくして私は決心した。

「ここを出て、私達2人で生きていこうのよ」

「お嬢様……はい」

私達の瞳の奥には既に明るい輝きなど無い。

変わりに決して許されることのない十字架を背負い、この世界を生きていく。

たつた2人で。

私達は持てるだけの札束を抱えて家を抜け出し、とにかく遠くへ走った。

いくつも山を越えて遠く遠く、誰も私達を知らない場所までひたすらに……。

「お嬢様、この街で落ち着きませんか？」

「ああ、そうだな」

野宿を繰り返して1週間以上、お金には当面困らないだろうけどそろそろ身を潜める場所を探すことにした。

「とは言つても、まだ11歳だから家も借りれないよなー」

「そうですね……」

四季は夜になるとあの光景を思い出して震え出すことがよくある。だから他の誰かと一緒に暮らすわけにはいかない。

そんな時、活気盛んな田舎町で私の目に1枚のポスターが止まつた。

A4サイズの黒地の紙に、赤色の字で書かれた文章をそつと口にする。

「年齢、職業不問……危険有、寝床提供」

頬を汗が伝う緊張感と共に私はどこか興味をそそられていた。

「今更『危険』なんて言葉……私は大丈夫ですよ」

隣の四季は無機質にそう言ってみせた。

その言葉を聞いて私にはもう迷いなどなかった。

どんなことをするかなんて分からなければ、十字架を抱えた私達にはお似合いな仕事だろう。

半ばヤケクソ気味だが、私達は物騒なチラシに書かれた『KILL』という店に向かつた。

それから4年があつという間に過ぎた。

危険な仕事というのは簡単に言えば法に触れることだ。

人を殺して逃げ出してきた私達にそれ以上危険なことなど無く、言われるがままに仕事をこなしている。

「御凪、四季、仕事だ」

色黒で筋肉質のこの男が一応この『KILL』で一番偉い人。

品の無い金色の長髪で野太い声、自称32歳の小林さんです。

「今回も人を殺してもらう可能性がある」

そう、今回も、だ。

ここでの私達の実力は4年でトップにまで上りつめた。今では困つたことならお2人に、とまで言われている。

その一番の要因は四季の圧倒的な戦闘力だ。

10歳で空手と柔道をマスターした彼女は、この4年間でさうにスキルアップ。

刃物を扱うために剣道を、身のこなしをよくするためにダンスを習つた。

今更ながら思うが、四季の運動神經は抜群だ。

ちなみにもちろん両親を殺したこととは誰にも言つていない。

「詳しい内容は何でしょつか？」

仕事の話は4階建ての事務所の2階、同じの一一番奥の個室でされる。

私は壁に寄りかかり、四季は机を挟んで小林さんの正面の椅子に腰を下ろす。

依頼の実行をはじめ、小難しい決まりは物覚えのいい四季が全て担当する。

じゃあ私は何をするか？

四季の物覚えが良くなつたことを幸とするならば、私の傍から離れることが出来なくなつたことが不幸だらう。

「つまり、そのターゲットを備考していつちやつてる場合は殺せつてことか？」

ちなみに私の性格はとても捻くれた。

「ま、そんなとこだ。出来るな？」

「分かりました」

四季は丁寧な口調でお辞儀する。

でもその目はいつも死んだ魚のようになんでいる。私といふときは以外は、だが。

「四季」

「はい」

事務所から出て私は四季に声を掛ける。彼女の声は先程とは別人のように明るい。

「また人を殺すかもしれない、大丈夫か？」

「もう慣れましたよ。夜も普通に眠れますし」

その言葉に嘘は感じられない。だが……。

「そう……か」

でもそれを喜ぶことなどできるわけがない。

「それじゃ、行こうか」

「はい、お嬢様」

ツインテールの私とポニーの四季、どちらも腰まで届く長い髪をなびかせながら私達は仲の良い姉妹のように並んで歩きだし

た。

そして、この仕事が私達とあの男を巡り合わせることとなる。

「……あ、荷物忘れた」

02・十日架の絆（後書き）

第一話に続きこの第一話も2／19に編集しました。
ご了承下さい。

from ルキ

03・着いのガバメント

仕事での私達の服装はセーラー服。15歳だから怪しい感じか完璧に似合う！

小林さんの趣味（？）で事務所には数種類のものが2組セットで収納されている。

「四季、これなんかどうだ？」

「わ、私には勿体ないです。お嬢様がぜひ…」

「い、いや、私もこれは……」

「これはどうでしよう！？」

「お、いいね、それにしよう…」

女の子らしいキャピキャピした声を飛び交わせながら選んだ今日の服は白。襟は白いラインが入った水色。スカーフの代わりに青くて細めのネクタイを締めて、スカートは青と水色と白のチェック柄。アニメに使われてそうな可愛い可愛いセーラー服です！

もう6月も終わるから上には羽織らなくてよし。

部屋から出てきた私達を小林さんは鼻息荒く興奮気味で待っていた。

「あ、相変わらず可愛いじゃねーか」

小林豊一、自称32歳、見た目は外国人マフィア。

その実態は、ロリコン。

「セクハラー！」

私達は手を繋いで笑いながら小林さんの横を通り過ぎ、出口へ駆けた。

「お前ら、持つてけ！」

小林さんは鉄の塊2つを投げてくる。

「ちゃんと生きて帰つてこいよ」

それぞれの受け取る手にはズシッと重く冷たい感覚がのしかかる。

それをスカートの中、太腿に装備したレッグホルスターへ収めた
私達は手を振つて今度こそ事務所を出た。

「で、今回の作戦は？」

私の質問に、四季は手帳を取り出して目を通し始めた。

「この近辺に潜む連續殺人犯と思われるこの男を尾行し、犯人だと
断定できたら警察に気付かれないように始末する、ということなの
で……どうしましょう？」

四季から渡された一枚の写真、街中での盗撮写真と思われるそれ
には、右手に髑髏ドクロのタトゥーが入ったスキンヘッドで切れ長の目を
した男が写っている。

「被害者の傷跡から計算するに、どの犯行でも使われたのは太刀ら
しいです」

包丁やナイフとではレベルが全然違う太刀。刃長が長い分、当然
その重さも増すから扱いは難しい。

犯人が素人ならそう困る仕事ではないが、もしも刀の扱いに慣れ
た男だつたら……厄介だな。最近の私達の仕事でも最も危ない仕事
になる。

「1つ気になることがあって……」

四季は手帳のあるページに差し掛かると歩くのを止めた。

「何だ？」

私は横からそのページを覗く。

「犯行現場には被害者の血でメッセージが残されているんです」

1人目の現場から順に、『keen』『I』『lacerate』
『lethal』。

「……四季、英語できたよな？」

家庭教師の努力も虚しく、私はすっかり記憶から抜けてしまつて
いる。

「10歳の頃に英検2級の問題を解かされて一問間違えたレベルで
すが。意味は順にざつと『鋭い』『私は』『切り裂く』『死をもた

らす』です

くつ、四季め！ それは何の当てつけだ！？ 悪かつた、私が『I』の意味も分からぬほどのおバカさんで！

まあ、和訳してもらえば文としての意味もなんとなく読み取れる。でも手掛けりにはなりそうも……うん？

「『I』だけ大文字なんだな」

「そうですね。……だけ……！」

四季は何かに気付いたように顔を上げた。

「お、お嬢様……犯人の次の狙いが分かりました」

震える唇で四季は途切れ途切れ言葉を繋ぐ。

私はさつきの当てつけなどすっかり忘れ、彼女の次の言葉を待つた。

「Iの4つの単語の頭文字を順に読むと……k、I、l、l」

「『k I l l』！？」

「そうです、恐らく次の狙いは……私達！」

私は背筋に寒気を感じ、バツと来た道を振り返る。

動物の本能とでも言うのか、反射的に何か悪い予感を感じたのだ。それと同時に四季の右ポケットに入っている携帯が鳴りだした。画面に映し出された発信者の名前は 小林さんだ！

「も、もしもし！？」

四季は震える手で携帯を開き、耳と口にそれを押しつける。

『今回の任務は……中止だ……しばらくは……どこかに隠れて、ぐあああっ！！』

「小林さん！？」

『ツー……ツー……』

最悪の展開が私達の脳裏を過り、通話の切れた携帯をポケットに戻したところで四季は震えながら私の手を取つて走りだす。

「行きましょう！」

「ああ！」

私達は事務所へと疾走した。

その方角からはつづくと黒煙が上りだしている。

先月改装したばかりの、殺しを仕事にする『KILL』の事務所は白塗りで落ち着いた外観の4階建て。

1階はどこにでもあるような会社のロビーを繕っている。2階は小林さんの趣味（？）の数々の物置と事務用のデスクとパソコンが置かれていて、仕事の話をする個室もここにある。

3階にあるのは武器の保管庫と金庫と小林さんの個室。

4階は家無き子達のための部屋がいくつか。

そんなビルが今、私達の目の前で瓦礫の山となっている。

「小林さん！？ みんな！？」

私の声は野次馬の喧騒に搔き消された。

ところどころ、コンクリートの塊と塊の間から血が流れている。

「…………隠れてろって…………言つただろうが…………」

崩落した事務所の向かい側、茶色の空き家とクリーム色のビルの間の細い路地から、吐息に混ざりながら消えそうな声が聞こえてきた。

この騒ぎに中、なぜ小林さんの声が届いたかは謎だ。

反射的に振り返った私と四季の顔は、銃を持つて焼け野原に佇む少年のように絶望に満ちていただろう。

「こ、小林さん！？」

私達の声は重なり、すぐに駆け寄り、壁にもたれる小林と目線を合わせるように膝をついた。

「人を……幽霊、みたいに……見るなつて……」

私は小林さんの身体を見てゾッとした。

両足は付いてるもの火傷で皮膚は剥がれ、左腕の肘より少し上のあたりには細い鉄筋が突き刺さり服はどす黒く染まっている。頭から流れる血で顔の左側は赤く染められた。

口元から垂れる血が内臓の損傷も示している。

「すぐに病院に……！」

立ち上がろうとした四季の腕を生きている右手が掴んで静止させた。

「もう無理だ！ 自分の……」とだ、分かる……」

呼吸が荒い。このままじゃ本当に危ない！

「俺達を、襲つたのは……」

「分かつてます。私達の仕事の犯人ですよね」

四季は小林さんの口数が少なくすむように続きを代わりに述べた。

「そうだ……。奴は1人だ……だが、強すぎる……」

「素人ではないんですね。それに、ビルを壊すほどの力って……」

私は瓦礫を横目に見ながら呟いた。

「お前達は……逃げる。敵討ちなんて、真似は、するな……」

「で、でもっ！」

四季の右手は既にスカートの中の銃を握り締めている。

「生きてくれ！」

小林さんは両手で私達の肩を掴んだ。鉄筋が突き刺さったままの左腕は震えている。

「ゴホッ！」

「生きて……お前達のようにな……苦しんでいる奴を……救え！」

「ゴホッ！ ゴホッ！」

咳をする度に口からは赤い液体が流れていく。

私達の肩を掴んでいた腕は力を失つて地面に落ちた。

「その、銃はな……」

私達が事務所を出る直前に小林さんが投げ渡してくれた2丁の拳銃。

「俺の親父から……貰つたもんだ……。背中を、預けられる仲間に託せつて……」

私達はレッグホルスターに収まつていい拳銃に目を落とした。
「俺には、相棒ができなかつた……。だが、信頼できる仲間には……会えた……みたいだ」

「小林さん……」

「御凪……お前はそれを……自分の命を……任せられる、相棒に

……」

「一」、小林さん……？

……返事は、ない。

「小林さん……いや……イヤアアアアアア――――――――――――――

私の叫び声は喧騒を裂いて空へ昇る小林さんの後を追つた。初めて知つた……。

『死ぬ』つてのは、とても悲しいことなんだ……。

「四季……私達は……生きていいのかな？」

『生きる』という価値があるのかな？

「……分かりません、でも」

四季は俯きながらゆっくり立ち上ると小林さんの形見となつた拳銃　コルトガバメント雪上迷彩モデル　を右手で抜き、左手で包むように抱きしめた。

「死んでいった仲間の分も生きる」とは……きっと出来ます！」

顔を上げ、見開いたその両目からは一滴の涙が流れて消えた。「……ごめんなさい、小林さん。私達はあなたの命令に背きます」徐々に冷たくなつていく彼に背を向け、私は横目で四季を見る。彼女は小さく頷いてくれた。私はそれに安心しながら頷き返す。「私達は生きる為に……人を殺します」

決して死はない。

こんな世界でも、這いずり回つても、生きて、生きて、私達が生きた証を残してやる！

必ず……一の銃　コルトガバメント砂漠迷彩モデル　に誓つて！

「行きましょう、お嬢様！」

「ああ！」

決意を胸に、歩き出そうとした時だった。

ババババ！

今の今まで気づかなかつた。

ここから北東に1000m、高度は20mくらいだらう。
明らかに不審なヘリがこちらに近づいてきている。

「あれは……」

四季は目を細めて機体を確認する。

「対戦車・対地攻撃用の攻撃ヘリコプター、AH-64アパッチです！ 今もアメリカ陸軍の主力として現役で使われています！」
攻撃ヘリコプターとは、武器を搭載し対地攻撃を主任務とする軍用のヘリコプターのこと。

固定武装はM230機関砲が一門。搭載弾数は最大1200発で最大射程は約3000m。

つまり、私達は既にアパッチの絶対半径キリングレンジにいる。

絶対半径とは、敵を確実に仕留められる距離のことだ。

「くそつ！ 敵は一人じやなかつたのか！？」

回転翼の音が大きくなるにつれ、私の心臓は鼓動を早めた。

「あのアパッチ、AGM-114ヘルファイア空対地ミサイルを装備しています！ 弾数は恐らく16発です！」

「『空飛ぶ戦車』 重装備、重装甲が可能なことからそつ評されることがある 相手にどうしろつていうんだ！」

「こんなガバ²丁で何ができるつていうんだ！」

「お嬢様、ここはいつたん引いて命を繋ぎましょうー！」

「……そうだな」

私達はガバをレッグホルスターへ戻し、『K111』の残骸とアパッチを結んで垂直となる北西方向へ走つた。

見つからないようになるべく細い路地を進み、息が切れるまで走つた。

バリバリバリ！！

背中の方で鳴つた轟音は機関砲だらう。

生き残りを消すために集まつた野次馬に向けたものに違いない。
あと少し遅ければ、今頃私達も……。

どうやら相当ヤバイ相手じゃこな、今回の目標は、
ターゲット

03・誓いのガバメント（後書き）

今回は前作に繋がる伏線の1つ、源三のガバについて書いてみました。

そしてロリコン、小林さんの感動（？）の最期、……（＜――＞）

ルキの特徴：すぐにキャラを殺すwww

ラストに戦闘シーンっぽいのを少しだけ挟んでみました。

アパッチについてはwikipedia調べです。

この後も銃や戦闘機なんかが出てくるかもしれません（これはまだ未定）間違いに気付くことがあつたら教えてくださいm（――）

これからドンドン派手なシーンを加えていきますからね！

第4話「あなたの弾丸」へ続く！！

from ルキ

私達の家とも言える『KILL』が襲われてから3日。あのアパッチは無差別な銃撃を終えると、来た道に沿つて消えてしまった。

今は街のはずれに見つけた空き家に身を潜めている。ローテージを思わせるような木造の一戸建てだ。時刻は午後の7時を回ろうとしていて、6月の終わりといえどもちょうど日入りの時間。

ちやぶ台の上には小林さんの形見であるガバメントが2丁。雪上迷彩と砂漠迷彩モデル。この迷彩……いつたい小林さんのお父さんはどんな修羅場を切り抜けてきたんだろう。

2丁のガバの横には規則的に立てられた金色の銃弾
C P 弾 が16発。

この .45といつのは口径のことで、0 .45インチだ。

コルトガバメントの装弾数は7 + 1 の8発。つまり予備の弾倉は無い。

これじゃあアパッチどろか敵1人と戦うのも危ない。

「弾をなんとかしなきやな……」

当てはないが、とりあえず四季に今の問題の1つを書いてみる。

「そうですね……。お嬢様にコレを使わせるわけにはいきませんし、ガバは重さ的に二丁拳銃に適していても私は得意ではないので予備の弾倉を1つ確保できますが……。今度の相手を考えると全く足りませんね」

当初は髑髏のタトゥーが入ったスキンヘッドで切れ長の目をした男だけだと思っていたのに、蓋を開けてみれば『空飛ぶ戦車』ことアメリカ陸軍の主力、アパッチときた。

ロケランの1つでもなきや勝負にならない。

「あと、接近戦用にも何か欲しいです」

これまで髑髏の男は連續殺人を行い、その凶器に太刀が使われていることが分かっている。

接近戦に持ち込まれたら、拳銃しかない私達の勝ち目はますます薄くなる。

「要するに、最低でも弾倉と剣が必要なんだな」

「そうすれば勝負にはなるはずです。……アパッチを除いて」

「それはまた考えよう。とりあえず『KILL』に行つてみよう

「えつ！？」

私の提案に四季は目を丸くした。

「瓦礫の下から何か使えるものが出でてくるかもしれないだろ？」「でも、警察とかいませんか？」

「いや、それは……ほら！ 夜になればもしかしたら……」

「…………」

四季は右手の人差し指を顎に当てて悩む。

「まあ、とりあえず行くだけ行ってみましょうか」

そんなわけで時刻は0時。

アパッチの機関砲が暴れたおかげで辺りの街灯は粉々。お蔭でうまい具合に闇に紛れ込み、瓦礫の山は目の前だ。

「やつぱり警察がいますね」

「まあ、あんなことがあって警察が動かないほうがあかしいよな」

ガタイのいい青い制服の男が……確認できるだけで4人はいる。

「なあ、あの警官から銃を奪えないか？」

「失敗したら一大事ですよ？ それに今の日本の警官が使っている拳銃は二ユーナンブM60が多く、.38口径なのでガバとは使う

銃弾が違うんです」

「二ユーナンブごと奪つて使うのは？」

「それでもかまいませんが……今回はどうしてもガバで戦いたいん

です「

四季の優しい口調の中に、わずかだが信念のような強い思いが感じられた。

「そう……だな、すまない」

「いえ……」

マズイ、変な空気になつた。

「そ、それで、どうやって近づいてつか……？」

「近くで事件で起こつてくれればいいんですけどね」

「ははっ、そうだな」

もちろん私達は「冗談で言つた。不謹慎なのは分かっている。だけどまさか、本当に事件が起るとは……」。

警官達は無線で何かを話していると思つたら、パトカーに乗つてどこかへ行つてしまつた。

「……これは、チャンスだな」

「はい、お嬢様」

私達は警官が残つていなか心配だつたが、予感的中。1人だけ残つていた。

「どうする!?」

答えは「こうだ！」

「きやつ、ヤダ！ ヤメテ！」

私の全力の甘く幼い口り声。

タツタツタツタ！

駆け足が近づいてくる。

「何をしている!?」

声がした路地に拳銃を構えて姿を見せた警官。やはり二コ一ナンブM60だ。

「……あれ？」

警官の目の前には、誰もいなかつた。

「……つ！？ ぐう……」

気配を消して背後を取つた四季は腕を首に回して一気に締め上げ、

氣絶させた。

「ナイスだ、四季！」

青い丸型ボリバケツに隠れていた私は姿を見せ、四季の手を取つて残骸の山へ駆けた。

「お嬢様、何か見つかりましたー？」

「うーん……どれも使えそうにないなー。そつちばどうだ？」

「こっちもダメですねー」

武器の保管は3階でしていたから、ここまで崩れてこるとどれも壊れてしまつている。

「……！ お嬢様、弾倉です！」

「ホントか！？」

四季が見つけた黒い官ケースの中には・45ACP弾が詰まつた真新しい弾倉が4つと、一枚の紙切れが入つていた。

「何だこれ？ なになに？ ……これがいつか、誰かの役に立つことを祈る。小林……」

「小林さんが、これを……？」

四季は思わず官ケースを抱きしめた。

「……四季、マズイ。車の音がする」

恐らくさつきのパートカーが帰つてきたんだろう。

「今日のところは帰るぞ」

「……」

「おい、四季？」

「この音、パートカーじゃありません」

「まさか、軍用車両か？」

「とりあえずどかに隠れましょ」

私達はなるべく音を立てずに反対側の通りに移り、少し離れたところに生きていた茂みに隠れた。

「あれは……ガントラックですね」

ガントラックとは、小型もしくは中型の輸送用トラックのキャビ

ンと荷台に装甲を施した即席の軍用車両のことだ。

攻撃ヘリの次はガントラつて……やつらはいつたい何者なんだ?

「あれ、なかなかの装備ですよ」

「ああ、分かつていいるさ。」

重機関銃ヘビーマシンガンが1つと、

軽機関銃ライトマシンガンを持つた男が3人。

対戦車用とかじやない。アレは私達を狙つた装備だ。どうする? 今あんなのと戦つて勝てるか?

答えは否! 考えるまでもないつて!

「このままやつらが去るのを待とづ」

「ですね」

しかしここでさりに車の音が聞こえてきた。

今度こそ、さつきのパトカーだ。

「マズイ……な」

「マズイ……ですね」

ガントラとパーカーが鉢合わせ……間違いなく銃撃戦が始まつてしまつ!

バリバリバリバリ!!

悪い予感ほどよく当たるものだ。

ガントラックの4つの機関銃が早々と火を噴いた。

2台のパトカーの先頭を走つていた方は集中砲火に遭い、フロント部分が爆発し後部が浮いた。

制御を失つたままガードレールに突撃し、10mほど火花を上げて止まつた。

脱出した2人の警官はフラフラしている。恐らくどこかしら怪我をしたのだろう。

もう一台のパトカーは90度回転して車体を壁にし、警官2人がニユーナンブで応戦している。

しかし拳銃の弾はガントラックの装甲に阻まれ、キンキン、と音を立てるだけだ。

バリバリバリバリ!!

鼓膜を激しく揺さぶる轟音が再び鳴り響く。その音に紛れて大きな爆発音が一つ。

先に集中砲火に遭っていたパトカーが、また爆発したのだ。今度はさつきのよりも大きなもので車体がその場で60cmほど浮いた。爆風で2人の警官は吹き飛ばされ、倒れたところを軽機関銃で蜂の巣にされた。跡には肉片が転がっているだけだ。

ファンファンファン！

遠くでサイレンが聞こえる。きっとパトカーの増援だろう。

「敵は私達に気付いていない。パトカーが増えたところでここから逃げよう」「う

「いや、下手に動いたら危険です」

「じゃあ、どうするんだ？」

「……警察と協力してやつらを倒しましょう」

「何言ってんだ、私達まで捕まっちゃうだろ？」

「顔を見られなければ大丈夫です。幸いにもここには近くに灯りがありません」

そう言つて四季はスカートの中 レッグホルスター から雪上迷彩のガバを取り出した。

「お嬢様はここにいて下さい。あなたは私が、守ります！」

そう言つて四季は走り出してしまった。

暗闇の奥に赤色警光灯が1、2、3……たくさん見える。

私は走りながら銃撃戦に適した位置を探している。あまり警察に近いと顔が割れるし、離れたら狙い撃ちにされる。

まだ敵は私には気づいていないようだが、時間の問題だろう。

「よし……」

うまい具合に通りに斜めに建てられた家を見つけた。

建物は左の警察側だからこれで気にせず撃ち合える。

拳銃の平均交戦距離はだいたい7m。ここからガントラックまでの距離も7m。ギリギリだな。

「小林さん、お嬢様……四季美里亜、いきます！」

右手で銃を持ち、左手は照準を安定させるために右手を包むように下から銃把グリップを支える。そして身体はなるべく晒さずに、ガバと顔だけを出して狙いを定める。

そういえばこれ、サプレッサー 銃身の先端に取り付ける、発射音と閃光を軽減するための筒状の装置 ついてないから1発撃つたら私の居場所、バレちゃうんだよね……。

ズダンツ！

雪化粧されたガバメントから撃ち出された・45ACP弾はガントラックの上で重機関銃を操る男の額を捉えた。

パトカーの赤色警光灯しか灯りがない中、敵は装甲されたトラックに乗り、機関銃で姿はあまり見えない。

それでも、私は撃ち殺した。

自分が生き残る為に、1人の人間を撃ち殺したのだ。

引き金を引いた後はすぐに身体を引っ込めて陰に隠れた。

敵はわずかだが動きが鈍り、確かな混乱を見せていく。それもそのはずだ。圧倒的有利な状況だったのに仲間が1人、撃たれたのだから。それも撃つた相手は警察じやない別のところにいて、姿を確認できていない。

「さあ、残りは軽機関銃の3人ね」

私は再び銃と顔だけを出して狙いを定める。次で完璧にこの場所はバレるわね。それでも、撃つ！

「私はお嬢様の弾丸。弾丸はただ、敵を貫くだけ」「

ズダンツ！ ギンツ！

放たれた弾は無人の重機関銃に当たり、L字の弾道を描いてまた1人、人間を絶命させた。

跳ねた弾で敵を撃つ技術、名前は忘れたから『跳弾狙撃』つて呼ぼう。

「あそこだ！」

バリバリバリバリ！

轟音とほぼ同時に隠れていた家の壁が粉々にされていく。

だが、敵の攻撃要因は既に半分。

警察もさつきより威力が下がったことに気付いたのか、一気に追い詰めようとしている。

「これ以上は無理かな……！」

私はそこから離れ、お嬢様がいる茂みに向かつた。

「バババババ！」

その途中、違う音がするのに気づいた。

これは3日前……いや、日付が回ったからもう4日前になるのか。突如現れたアパツチの回転翼の音だ。

「くそつ！ 逃げ切れない！」

アパツチは背の高いビルからその姿を現し、パトカーの群れに向かつてAGM-114ヘルファイア空対地ミサイルを放つた。

「ミ、ミサイル！？」

私は目を疑つた。いや、装備していたのに気づいていたはいた。だが、まさか本当に撃つてしまつなんて……。

ミサイルの着弾と同時に地面を衝撃が走つた。今の揺れ、震度4は堅いな。

アパツチはあらうことか、生き残ったパトカーに向かつてもう1発ミサイルを落とした。

間髪入れずに地震は続き、私はその場で膝をついた。

「お嬢様……！」

心配だ。戦いに巻き込まれてはいないだらうか。

バリバリバリバリ！！

アパツチの機関砲とガントラックの軽機関銃、2つの連射機の砲火で警官は皆殺し。警察は全滅した。

「はあ、はあ……お嬢様？」

茂みを視界に入れられる距離まできたが、そこにお嬢様の姿はなかつた。

今は上手く逃げてくれたことを祈るしかない！

私はその場で小さくなり、アパッチとガントラックが遠く過ぎ去るのをじっと待った。

04・あなたの弾丸（後書き）

2日連続投稿です

今回は途中から四季の視点でバトルシーンが進み、彼女が活躍する展開に！

しかし、またも現れたアパッチによってガントラックを仕留めきれず……。

さらに、姿を消してしまったれいは一体どこへ……？

第5話をこじつけ期待！

from ルキ

さつきまでの銃撃戦が終わり、嘘のような静けさだけが残されている。

「……四季！」

私は後ろから彼女に抱き着いた。

「お嬢様！？ よかつた、ご無事で……」

どうやら茂みに姿が見えなかつたことで心配をかけていたらしい。四季はガバメントの雪上迷彩をスカートの中にしまつと、なぜか私の頭を撫ではじめた。

「アパツチが来たところで危ないとthoughtて、気づかれないように移動したんだ」

私の説明を四季は優しい笑顔で聞いている。

「その……悪かつたな、心配かけて」

私は視線を横にそらし、少しの恥ずかしさを覚えながら言つた。

「お怪我が無くてなによ……り？」

四季は気づいてしまつた。

アパツチがミサイルを放ち地震のよつた衝撃が襲つたとき、私は転んでしまつた。その結果、左膝からは少しだが血が出でいる。

「フフツ、」このくらいは大丈夫だよ。お前は心配性すぎるぞ

私はその場で3回、ジャンプして見せた。

「それよりもお前は大丈夫だつたか？」

「は、はい」

「そつか

まだ不安そうな四季を安心させるために、私は自然な笑顔を作つて彼女の右肩をポンポンと叩いた。

私達は通りに出ると、自分達が生きて「る」とに不思議をすら感じてしまった。

炎上したままのパートカーの火で辺りが見えるが、地面も、建物も、全てが破壊されている。

「いてつ」

私は何かにつまずいてよろめいた。

「大丈夫ですか、お嬢様？ これは……」

四季が両手で抱え上げるそれは、ガントラックに乗っていた男が落とした軽機関銃ライトマシンガンだろう。

「私が『跳弾狙撃』リブスナイプで殺した男のものでしょう」

「りーふ……？」

「跳ねた弾で敵を撃つ技術です。私が命名しました」

「ふーん、カッコイイじゃん」

私は肘で四季の腰を軽く小突いた。彼女は恥ずかしさ半分、嬉しさ半分という顔をしている。

見るところによるとこの軽機関銃、アメリカ製のM60機関銃だ。オーストラリアとかでは今でも現役で使われている。

有効射程はオプションの三脚を使って1100m、装備の一脚を使って800m、点標的に対しては600m、移動する標的に対しては200m。熟練した者なら面射撃や制圧射撃で1500mにもなるという。

攻撃状況にも防御状況にも使うことができる、非常に便利な銃だ。

「一応持つて帰ろう」

「……」

「なに、使うかどうかは後で考えよう。また敵の手に戻るよりはいいだろう?」

「そうですね」

私は四季から奪うと両手に抱えた。

「警察のほう見てきますね」

四季は何か武器が落ちていなか、小走りで探しに行つた。

にしてもガントラックはたぶん日本製だろうが、アパッチ、M60とここまでアメリカもんが多いな。

まあ、たまたまだらつ。

もしも裏側にアメリカの何かが絡んでいたら……なんて、あるわけないよな。

「お嬢様ー、短刀を見つけましたー！」

考え事にふけっていたが、四季の声で現実世界に戻された。

短刀とは、長さ一尺（約30・3cm）以下の刀の総称で、英語でいう所のショートソードからナイフに相当する概念の武器だ。

「どれどれ……、これは懐剣だな」

かいけん、ふところがたな、とも呼ばれるこいつは護身用の短刀で、守り刀とも言われている。

「きっと、これを持っていた人のお守り代わりだつたんだな」

私の言葉に、四季はドキッとした様子だ。お守りをパクつて来ちゃつたんだから、まあ良い気分ではないよな。

「（主人様は死んじやつたんだし、今度は私達を守つてもらつが

「……はい」

四季はその守り刀を背中に隠し入れた。

他にはないようだし、帰るかな。今はこれ以上戦いたくないし。

四季のほうを見ると彼女も気持ちはお同じだつたのか、小さく頷いてくれた。

「よし、帰るぞー！」

「はい！」

今回はもうヘリの音も聞こえないし、何事もなく街はずれの空き家へ帰ることができた。

（）で現在の武器を確認しておこうと思つ。

コルトガバメント雪上迷彩モデル、砂漠迷彩モデルが1丁ずつ。
使用弾薬の・45ACP弾は残り45発で弾倉6個分。

雪上のは四季が使い、砂漠のは私の護身用。

M60機関銃が1つ。装弾数はベルト給弾式。使用弾薬の7・62mmNATO弾はざつと見、残り200発もないな。

こいつは対アパッチ用にでもしておこう。

最後に、守り刀が1つ。

剣と弾倉の確保。当初の目的はとりあえず達成ということでいいだろう。

次に敵戦力についてだ。

移動手段はAH-64アパッチとガントラック。

アパッチは重装備、重装甲が可能な『空飛ぶ戦車』と呼ばれる攻撃ヘリコプター。武装はM230機関砲が一門とAGM-114ヘルファイア空対地ミサイル。

ガントラックは重機関銃ヘビーマシングンを1つ搭載。それと軽機関銃を持つた男が3人乗っていて、内1人は四季が『跳弾狙撃』で射殺。そして『KIKE』の仇と思われるが、右手に觸體トトロのタトゥーが入ったスキンヘッドで切れ長の目をした男。こいつは恐らく相当な太刀の使い手。

奴らがどんな目的で動いているかは分からぬが、私達が狙われているのは間違いないだろうな。

しばらくの仮眠をとつて、時刻は午後1時。空はやたらと澄み渡つてゐる。

「ん？」

見ると、擦り剥いていた左膝に絆創膏バンソーコが貼られている。その犯人、四季の姿は見当たらない。

することもないので、家の中を物色してみようかな。

といつても、風呂とトイレを除いて2部屋しかないので対した期待はない。

タンスには……コートが1着。黒いトレーニングコートだ。

「冬用……だよな」

と言いつつも袖を通してみると

「ピッタリだ」

その場でくるりと回つてみるとキツくもなしブカブカでもない。

姿見が無いのが残念だ。

「…………お嬢様」

「…………」からか現れた四季は、今の私の行動をバツチリ見てしまったようだ。

「いや、違うんだ、これはつ…………」

「か、可愛い…………です」

四季の目はハートになつている。

おい、まさかせつちに目覚めたのか？

「お嬢様！ もう1回、もう1回ぐるぐる回つて！」

「ちょっと！ もうしたんだお前…？ や、やめり… ゼ!!」触つてんだ！？」

「お嬢様！ お嬢様！…！」

「離せバカ！ きやつ、ひめ…………そこは…………」

なぜか私は四季に押し倒され、彼女の手がセーラー服の中に滑り込んでいく。

目が、目がいつてる…

「や…………いやあああ…………」

「本当に…………すみませんでした」

賑やかな街並み。少し後ろをついて来る四季は同じ言葉を繰り返して8回目。

「…………」

今回ばかりは許さん！

あんな…………あんな卑猥な」とお…！

「…………お嬢様！」

四季は突然、私を細い路地に連れ込んだ。

「おまつ！ まだヤル氣…………ぐもつ…！」

私は彼女に口を塞がれた。

勢いで家を逃げ出したせいでトレーンチコートを着たままのがいけなかつたか…？

「シ——！」

そこで彼女の目が違つてゐるのに気がつき、私は固まつた。
固まつたというか、落ち着いたと言つたほうが正しいか。
仕事の時、鋭い目つきだ。

「あそここの男を見て下さい」

私は通りに顔を半分だけ出し、四季が指差す男を見た。
右手の甲には髑髏のタトゥー。黒いレザージャケットを着たスキンヘッドの男の後ろ姿。

間違いない、ヤツだ！

『K-1』を壊滅に追い込んだ男だ！

「追うぞ」

私達は尾行を始めた。

今にも殺してやりたいところだが人が多すぎるので

それに、敵は奴だけじゃない。向こうのアジトが分かればこれらに戦い方も変えられる。

澄んだ空はだんだんと黒く濁んだ雨雲に覆われてきた。
尾行を始めて約10分。

男は人と会うでもなく、買い物をするでもなく、ただ歩いているだけだった。

……散歩、なのか？

「油断は禁物ですよ」

四季め、噛み殺した欠伸に気づきやがつた。

男は急に駆け足になつて道を曲がつた。
気づかれた！？

「ちつ、どこに行つた！？」

急いで追うが男の気配はまるでしない。

こんな住宅街のど真ん中にアジトがあるのか？ それとも、まさか……？

「...」

「えりこましょひ、お嬢様！」

せつかくの手がかりなんだ！ 逃げられてたまるか！

「とにかく探すしかない」

私達は刃りを走り回つて男を深した。

……が、やはり見つかるわけもなく、すぐにバテた。私が。

「くそー！」

お嬢様、とりあえず落ち着いて……」

公園のベンチの前、私は悔しさから地団駄を踏んでしめた。まことに座つねがうれしかったのである。

「これが落ち着いていられるかー！」

歌謡の歴史

四季も顔の上に「？」を乗せて首を傾げて いる。

- 1 -

卷之三

「行くぞ！」

「行ともしう」

声は重なり
叫ひがした方へと急いた

「…………ですね」

四季はスカートの中からガハメントを取り出し、両手で胸の前で

「ハラミ」

ガチヤ。

限界は開いている。

家の中は、なんというかその……荒れている。

靴や洋服が散乱し、床は土足で上られたように砂が舞っている。そしてこの臭い……血だ。あまり時間の経っていない人間の血。それも……大量に。

廊下を渡り、リビングへの扉を開く。

バタン。

そこに広がっていたのは想像通りの景色だった。

本来は白を基調とした部屋だったのだろうが、今では赤1色。壁、テーブル、テレビ、床……隅っこにあるあの花は、確かスズランか？ とにかく全てが血で染められていた。

「チッ、遅かつたな。四季、一応2階も見てこい」

「はい、お嬢様」

そう、遅かつた。私達は街で犯人を見かけたにもかかわらず、尾行を撒かれ、結果としてまた関係の無い人間が死んでしまった。四季はすぐさま廊下に戻り、2階への階段を登つて行つた。

「さてと……」

想像と全く違つことが一つある。

部屋の真ん中あたりに転がっている2つの大きな肉片。この家の夫婦だろうが、これではない。

その目の前で今にも泣きそうな顔をした子供がいるのだ。子供といつても歳は私と同じか、少し上くらいだろう。

「君、ここのは息子？」

ブレザーブルのその少年と目が合つてしまい、とりあえず当然の質問をしてみた。

「…………」

思いつきり警戒してゐるな。

まあ、当たり前か。

自分の両親がこんなになつてて、今度は拳銃持つたセーラー服がご登場。

今までの世界では考えられないことだ。

まるで自分が映画の世界にでも迷い込んでしまつたんじやないか

悪い夢なら早く覚めてくれ……。
きっとそんな思いだろ？

「これはな……」

この少年のためにも、真実を伝えるべきなのが……。

「今、私達が戦っている組織の仕業。多分なんらかの形で……」両親は関わってしまったのだろ？……」

言えない……。連續殺人で、たまたま君の親が狙われて、偶然殺されてしまったなんて 言えない。

「私達ももう少し早く突き止めて追つていれば……クソッ！」

そう、私達のせいだ……。私達のせいで君の親は……！
それにしても分からぬ。

この両親は体中を撃たれ蜂の巣状態だ。

でも髑髏の男は、機関銃のよつた物は持つていなかつた。
それに銃を乱射したよつた音も聞こえなかつた。

そんなことを考え、しばし沈黙が流れていが……。

「なあ……戦うつて、一体あんた達は何と戦つてるんだ？」

何と……か。簡単そうで難しい質問だな。

私は少年の目を一瞬だけ見て、俯きながらこいつ言った。

「戦うのは勿論敵だけど……もつと……大切な何かの為だな。その為に私達は引き金を引き続けるしかないんだ。この世界に……」

生きてお前達のように苦しんでいる奴を救え

そう、私達は生きる為に戦つているんだ。

この汚い世界には私達のように地べたを這いつくばつて生きてる人がいっぱいいるんだ。

そんな奴らを助けられるのは……同じよつて地べたを這いつくばつている私達なんだ。

「2階見て来ましたが何もありませんでした」

四季が階段を下りながら私の背中に声を飛ばしてきた。

「嘘が下手だな。」

何がありました、つて顔に書いてあるぞ。

「そうか、ひとまず……戻るつ」

「この少年がいるからだろうな。2階でのことにはここを出てから聞くとしよう。」

「君、じゃあな」

私達は少年に背を向けて玄関へ戻った。

「……待てよ！」

よせ、そんな迷子みたいな声を出すな。
確かに私達は君みたいな奴を救いたい。
でも分かるだろ？ 私達がどんな危ない橋を渡っているか。そのまま目で見ただろ？

私と四季は同時に振り返り、四季は「？」を浮かべている。

「俺も……俺もお前達について行きたい！」

やつぱり……そう言うのか。

「えっ！？ 君、いきなりの入隊希望？」

四季は驚きのあまり素の表情で聞き返していく。
「俺も……俺もお前達について行きたい！」

やつぱり……そう言うのか。

少年はしつかりと首を縦に振った。

「……何で君はウチに入りたいと思つたの？」

「……この世界は生半端な気持ちで生きれるほど甘くはない。」

私は厳しい表情で、しかし目は虚ろにして心の奥を覗くように少年を見据えた。

「俺は両親を守れなかつた……。知らなかつたとはいえ、今は後悔でいっぱいだ。でも俺なんかただの高校生で、無力なのは自覚してるけど決めたんだ！ これから少しでも人を守れたら、つて！ だから俺は……あんたにこの命を捧げるつもりで守り抜いてみせる！」

少年は拳は強く握り締め、その目はまっすぐ私を視線に応えた。

「フフツ、君は面白いね。でも守りたいって言つたつて、私達は戦うのが仕事。人を殺すのなんて当たり前だ。君にそこまでの覚悟が

あるのか？」

私を守るつてのはそういうことだ。

敵対する全てを消すつもりでいなければ、守りたいものも、大切なもののも、自分自身すら守れない。

そして私は……普通の世界の人間ではないんだ。

「俺はあんたを守るつて言つたろ？」

フフフ……。こんなにまっすぐした目を持った人間、久しぶりに会つたな。

いいだらう、なら守つてみせろ。

もう楽な人生は送れないぞ！

「君、名前は？」

私は立ち上がりつてこつちに歩いてくる少年に聞いた。

紺色のブレザーは学校の指定服だらう。髪は黒くて短く、小柄で

私達とさほど身長は変わらない。

「俺は、火村源三だ」

……何だらう。

初めて会つたのに……初めて会つた気がしない。

懐かしいような……なんだこの、お帰りつて言いたくなる気持ち

は。

「源三……か。よし、ついてこい。私は御凪れい。れいでいい

「私は四季、よろしくね！」

ガチャ。

3人となつた私達は家を出た。

雨雲はいつの間にか消え去り、薄暗い空には三田円が浮かんでいる。

四季はどこか落ち着きがなく二コ二コしている。

源三は不安と決意が入り混じつたような顔だ。

私は……今日、新しい仲間を見つけた。

「あ、そうだ。ここを出る前に、だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6405p/>

bullets 0から始まる物語

2011年3月10日00時10分発行